

阪神淡路大震災・借上復興住宅裁判での陳述書等からみる入居者の健康状態と課題

西宮市・広川内科クリニック 広川 恵一（医師）

【共同研究者】 吉田維一 市川英恵

小川昭 岡林信一 山田友道

【目的】

現在の借上復興住宅裁判での入居者の①健康課題・転居リスク、②コミュニティ、住み慣れた住居とかかりつけ医と見守りの意義、③高齢・障害者への配慮について明らかにする。

【方法】

I 2015年10月兵庫協会西宮芦屋支部施行の借上住宅入居者アンケート

男性3名(65～68歳)・女性12名(62～92歳)：平均76歳

II 借上住宅裁判提出意見書のうち11件からみる健康課題

男性4名(68～85歳)・女性4名(74～82歳)：平均76歳

III フレイル基本チェックリスト施行10名より検討を行う

【結果】

I アンケート結果

高血圧12名、糖尿病5名。通院15名全員服薬中。癌既往3名。入院歴11名。腰痛9名・膝痛6名。意見に「転居するとかかりつけの医療機関から離れることなどに不安」

II 意見書結果

高血圧5名、糖尿病3名。通院11名全員服薬中。循環・代謝と整形外科的疾患・感覚器障害が主。癌既往5名（胃癌・肺癌・乳癌・甲状腺癌・前立腺癌）。入院歴11名。脊柱管狭窄症・骨折既往11名。配偶者との死別6名。意見に「今の家は健康の一部」「この部屋でこそ今の状態でも喜んで日々生きていける」「80歳を過ぎて転居先で知り合いを作るのは難しい」「買い物や病院などの生活環境は生活の支え」。

III フレイルリスト結果

フレイルとされる8点以上8名、7点2名。椅子からつかまり立ち必要9名。転倒不安9名。友人訪問できず8名。外出減7名、億劫になった9名。自ら役立たない思い5名。

【考察】

①内科・整形外科的疾患が多くみられる

②加齢による機能の低下と疾患で日常生活が制限されている

③それによる閉じこもり・うつ傾向と心身の機能低下を招いている

④コミュニティ、住み慣れた住居とかかりつけ医が健康の支えとなっている

⑤地域住民・見守り、医療・看護・介護、権理擁護・法律専門家との連携が不可欠

【結果】

復興住宅入居者、高齢・障害者の暮らしと健康にコミュニティ、住み慣れた住居と医療の役割は大きいことが分かった。医学的・社会的な知見を活かしさらに明らかにしていくことが求められる。